喫煙考

及川純一

嫌煙権運動が日本で活発化したのは、昭和五十二～三年頃だったかと記憶している。最近は当時のような目立った動きはないが、現厚相の渡辺恒夫氏が前任者との引継ぎの際、「タバコは健康にいい」という発言をしてしまった。これを聞いた嫌煙団体がさっそく噛み付いたというのが最も新しい動きであろう。

本来、嫌煙権運動というのは、非喫煙者の立場を尊重して喫煙のT・P・Oを厳守せよといういわゆるマナーの向上にあると理解している。しかし時には曲解もされ、愛煙家からはそれこそ煙たい存在に違いない。

さて、これから述べようとしていることは、嫌煙者の立場に立ったタバコ（喫煙）に対する私見である。筆者は非喫煙者であり、愛煙家の中で労働を強いられるという弱者の立場を身にしみて感じている一人である。そんなわけで本稿には宿怨の念が込められていることをお許し願いたい。

承知の通り、タバコはコロンブスが新大陸から梅毒とともに旧大陸へ持ち帰った（一四九三年頃）ものである。宇賀田氏によれば、そもそも喫煙行為というものは宗教的儀式からきているものだが、コロンブスの発見当時はすでに嗜好化していたという。そして地域によって異なるが、原住民のほとんどが葉巻かパイプ、あるいは嗅タバコの形で喫煙を楽しんでいたようである。

その後、ヨーロッパに伝来したタバコは、まず鑑賞用の植物となり、やがては切傷等の薬、あるいは悪疫用の予防薬として信じられ用いられた事もあった。このような段階を経て次第に喫煙が日常化していくのであるが、この喫煙という革新的な行為に批判が起こり禁煙令が出された。日本でも五回（慶長十四年・十五年・十七年・元和元年・二年）ほど禁煙令が出されたというが、他の諸国同様いっこうに守られなかったようである。ともあれタバコはコロンブス以後、紆余曲折を経て、今なお世界中で吸いつづけられている。単に吸って煙を出すという行為ではあるが、そこには一つの文化や風俗が形づくられていったという事実は否めない。

では、世の権力者達をもってしても禁煙させ得なかったタバコには、どのような魅力が存在するのだろう。そしてこの喫煙欲求というものはどこから起こるものなのだろうか。

ある調査によれば、タバコの魅力は「気分転換」「気持ちが休まる」「手持ちぶさたの解消」「単なる習慣で魅力はない」、という順であったという。また、別の報告ではタバコの効果というものを上げている。それは、

①ストレス・不安の鎮静化
②脳中枢に働いて眠気を取り、空腹感を抑える
③五感に対して総合的刺激を与える
④生活リズムの調整に役立つ

⑤社会心理的な効果（自己表現の手段）
⑥はけ口としての代償行為

という六項目である。各々もっともな理由であると愛煙家諸氏はうなづいておられる事と思う。現代のような複雑化していく社会生活は、肉体的にも精神的にも疲労を生む。喫煙はその解決策の一つであろうし、一番身近で心の慰めになってくれるものと言えるのかもしれない。また（特に女性に多いが）現代生活の一つのファッションにもなっている。

しかし、何かすっきりしない所がある。というのは、上述した魅力なり効果が、初めて喫煙する理由と掛離れているからである。愛煙家諸氏は思い出されると思うが、喫煙の動機は「好奇心」「友人にすすめられる」「何でも経験したい」ということであって、けっして「気分転換」「気持ちが休まる」ではないのである。この違いは何を意味しているのだろうか。多分、タバコを吸う必然性を否定するものだろう。したがってタバコの魅力あるいは効果というものは、喫煙を継続させたいがための言いわけにすぎないのではないだろうか。このように考えるとタバコを吸いたいという喫煙欲求は、この言いわけのもっと奥深い内面人間の意識外に存在しているような気がする。

第一に考えられるのが「ニコチン中毒」ということである。麻薬などと同様にニコチンの中毒によって人間が喫煙を欲求するのではないかということである。一定量のニコチン量で人間は死んでしまうという。それでも死なないというのは、ニコチンが分解しやすくて体内に蓄積しないためらしい。

このニコチンが人体に与える影響は以下の五項目に分けることができるようだ。つまり、

①血圧の上昇
②脈拍数の増加
③初期興奮、のち鎮静
④末梢血管の収縮
⑤血糖や脂肪酸を増す

である。これらのうち喫煙欲求と関係ありそうなのは③である。この作用はニコチンの精神的な作用と言っていいと思うが、眠気を取り気持ちを静めるという作用を持っているということである。この作用は、タバコの魅力の一つにあげられているが、ただちにこれが喫煙欲求の根本原因だと結論づけることはできないだろう。なぜなら非喫煙者の受動的喫煙によって非喫煙者もニコチンを吸収しているからだ。非喫煙者がそのことによって喫煙を始めるということはまず考えられないからである。

次に考えられることは癖ということである。その昔、休息を意味する「タバコ」に代表されるように喫煙の時間、場所等はある程度規制されていたようである。しかし、それは生産量とか喫煙のやり方などからくる制限ではなかっただろうか。現代では大量に生産され、手軽で持ち運びも簡単な商品である。このためタバコは分単位で消費される嗜好品となったのである。一日に何回となく同じ行為を繰り返えす、しかもそれが毎日で、何年と続けば癖にならないはずがないではないか。

もう一つ考えられる事は、「口に銜える」ということである。これは非常に重要な意味を持っているのではなかろうか。人間は他の動物と違って発情期以外の性交が可能である。これは狩猟生活していく上で一夫一婦制を維持しなければならなくなり、その絆を深めるための代償行為であるという。それにともなって性行動も精巧に

なり、特別な器官にたくさんの神経が集中し、性愛的刺激に敏感となっている。唇・口腔・鼻などもそのような器官であり、他の刺激に対しても敏感な部分である。また、赤ちゃんが最初に快感を覚えるのが排便・排尿であり、次が口であるという。排便後の安堵感が快感を生む。これについては、ちょっとゆきすぎた性愛好者が灌腸を使用する事実を見逃してはいけない。このような快感は成人しても存在するという証明者なのである。口についても同様に、指を銜えて安心するという子供の行為が生む快感は、成人しても失せてはいないはずだ。無意識のうちに唇にふれていていたり、鉛筆や何かを噛んでみたりした事はないだろうか。性愛的な快感とは異なるが、敏感な唇や口腔にふれることが快感となり、その結果心理的に安心感を生むのだろうと思われる。つまりタバコはちょうど成人達の乳首の役割を果しているのではなかろうか。それは、水を飲みたいという欲求と同様に我々の意識の外にあるものと考えるのである。

以上述べたように喫煙欲求というものは、「癖」「無意識な快感」の二つの相互作用によって起こると思われる。

次にタバコの害について述べたい。よく言われることは、ガンになりやすいということだ。平山氏らの調査によれば、非喫煙者に対する喫煙者のガンの死亡率は、喉頭ガン一三・六倍・口腔ガン七・〇倍肺ガン三・六倍であった。

未成年時代から吸い始めれば、その危険性はかなり高まるという また、女性の喫煙増加にともなって未熟児出産が増えているが、他に女性に与える影響をあげると、タバコ一本につき二十mgのビタミンCを失う、歯や骨格がもろくなる、血管が弱まり皮下出血・粘膜出血を起こす、感染に対する抵抗力が弱まる、流産、血圧異常、肌荒れによる老化現象などである。

前述の通りタバコは毒であるが、法的に許されたものである以上吸うか否かは個人の自由であり、ガンで死のうが流産しようがそれは喫煙者個々の責任に応じて行った行為の結果であり、他人がとやかく言うべきことではないはずだ。ところが、本稿のごとく宿怨を感じている者がおるということはどういう事なのか。それは他人に迷惑をかけているからである。「喫煙は個人の自由」という原則論は他人に迷惑を及ぼさないという条件の上に成立しているということを忘れてはいけないのだ。喫煙というものが、酒と同じように口から体内に入り、ある一定の場所で排出されるものであったなら、嫌煙権運動というものは起こらなかったかもしれない。ところが、愛煙家は一端口に入れた煙を無責任にも吐き出すし、火をつけたまま放置しておくではないか。タバコの害というものは、すべてこの煙に含まれる成分によってひき起こされているのだ。現代は喫煙者社会と言ってもよいほど愛煙家が多く、吸う機会もまた多い。加えて喫煙の場所・時間・場合の制限が少なかったこと、密封された生活空間が多いなどの理由から非喫煙者は受動的に喫煙を強いられているのである。このことによって非喫煙者は不快感を覚えながら喫煙者と同様の害を受けているのである。喫煙という行為が煙を発生させざるを得ない以上、喫煙者は上述の事実を認識すべきだ。タバコの煙害は、もはや公害なのである。

現在、非喫煙者を守るための施策が世界中でとられている。欧米では公共施設内はすべて禁煙であり、レストランや乗物の半分以上が禁煙席となっている。また、オーストラリアでは、他人にタバコの煙をふきかけた男が暴行罪に処されているし、サンフランシスコ市では「禁煙条例」が住民投票で成立している。これらはほんの一例にすぎないのである。

では日本の現状はといえば、いつどこでどんな場合に関係なく、当然のごとく好きな時に吸い、当然のごとく灰皿を請求し、あるいは当然のごとく路上に投げ捨てる。彼らの排出する煙によって非喫煙者は眼・鼻・喉に刺激を受ける他に悪臭が下着や頭髪にまで付着する。食事中の喫煙は食物の味を落とすし、自動車を貸せば、平然と喫煙し、灰皿をかたづけもしない。御丁寧に悪臭のおみやげまで残しておく。このように悪口を吐けばきりがない。

現在、非喫煙者のためにとられている対策は、微々たるものである。このような状態を打破し、非喫煙者の幸福な生活を確立するための若干の施策を提案したいと思う。

喫煙者は、喫煙に際して許可を求めるべきで、非喫煙者は、「御遠慮下さい。」という一言を忘れずに言う必要がある。この事が慣習化すれば、嫌煙権運動も成功したと同じである。さらに、喫煙者の義務として簡易灰皿を携帯すべきで、タバコの投捨て行為は慎まねばならない。

社会的には、公的機関が禁煙の広報活動を展開し、タバコの生産量を減らす方向に進むべきである。料金も高価格とし、家庭経済を圧迫させるべきだ。公共施設はもちろんのこと、病院・レストラン乗物等はすべて禁煙にするか喫煙所を設ける。また、喫茶店・スナック等の施設は喫煙・非喫煙の明示をする。タバコの自動販売機は全廃する。タバコの販売所を制限し増加させない　教師や医師は、その職場での喫煙を自粛する。以上思いつくまま述べたが、もしこれらが完全実施されたとしたなら、将来「喫煙店」などという商売が始められるかもしれない。そこは、内外あらゆる種類のタバコを置くが、箱売りはせずバラ売り専門である。客は喫茶店のそれと同様に、ボーイに(コーヒーの代りに)「マイルドセブン一本」などと言ってイスにすわる。やがて運ばれて来たタバコに火を付け、深く吸い込んでから吐き出す！

「ああ、やっぱりここのマイルドが一番うまい。」

などと言いながら、また一ぷく……。

空想は際限がないのでこの辺でやめるが、最後にアメリカ人、ヘレン・ボッテル女史の言葉を述べて本稿の締めとしたい。

『アメリカでは明らかに、たばこはもはや歓迎されてはいません。〝たばこはもうやめた〟と言えば尊敬の目で見られ、〝やっぱりダメでした〟と言えばあわれみの目で見られます。』

《参考・引用文献》

一、浅野牧茂　非喫煙者にとってのたばこ煙　環境情報科学十―三　一九八一　P九三〇～三九
二、宇賀田為吉　タバコの歴史　岩波書店　一九七七
三、田中冨吉　たばこの本　住宅新報社　一九七六
四、デズモンド・モリス　裸のサル　河出書房新社　一九七五
五、毎日新聞　一九七八・四・七
六、毎日新聞　一九七八・四
七、読売新聞　タバコ特集　一九七八・四・一七～六・二
八、読売新聞　一九八四・一・八
九、読売新聞社説　一九八四・一・九

車検・一般整備・点検・鈑金塗装・農業機械整備
(株)スズキ岩手販売 特約店
藤里自動車工業
江刺市藤里字向畑　TEL 工場 0197 3 ⑨ 3102
TEL 自宅 0197 3 ⑨ 3760・⑨ 3709